

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	猫の翻訳詩四編
Author(s)	吉中, 孝志
Citation	表現技術研究 , 18 : 105 - 114
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/53865">10.15027/53865</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/53865">https://doi.org/10.15027/53865</a>
Right	
Relation	



## 猫の翻訳詩四編

吉中 孝志 訳

隠遁猫 (The Retired Cat)

ウィリアム・クーパー (William Cowper, 1731-1800)<sup>(1)</sup>

詩人なら是非とも飼いたいと願うような、  
穏やかで厳肅な、詩人さんちの猫さんは、  
隠れられる、人目に付かない場所を尋ね  
求めるのをどうしてもやめられなかった。  
そこなら穴の中のネズミのように安全に、  
横になったり、座ったりして考えられる。  
その習慣に何処で染まってしまったのかは分からない――

おそらく、自然の女神御自身が、そういう  
哲学的な型に嵌めて猫さんの性格を造ったのか、  
そうでなければ、猫さんは、彼女のご主人様から学んだのだ。

時には、林檎の木や  
高い梨の木に優雅に登り、  
枝が都合よく二股に分かれた所に腰を下ろして、  
働いている庭師さんを観察したり、  
時には、空っぽの古いじょうろの中に入って  
安らぎと慰めを求めたりもした。

ここでは、この上なく几帳面な衣装を纏って、  
或る美しき乙女が、椅子籠<sup>2</sup>に乗って  
まさに宮廷へと運ばれていくところのように思えるためには、  
扇子以外に、何も欠けるものはなかったのだった。

しかし、変化を愛するのは、より賢い、  
我々人間族だけに限ったことではなさそうだ。

我らと同様に、猫族もまた  
変化への情熱を強く感じる。かくしてその猫さんもそうだった。

高い所に登ると、彼女は分かり始めた、  
風にあまりに晒されすぎる。

そこで、ブリキの古い鍋の中に入ったが、  
そこは冷たくて居心地が悪かった。

それで猫さんは願ったのだ、そんな場所の代わりに、  
もつと落ち着いた安らぎの場所が何処かにないものか、  
寒さもやって来ず、風も

あまりに無作法に彼女の毛並みを乱したりせぬような場所は、と。  
そして、その場所を最もありそうな状態の所に、  
彼女の飼い主の、居心地の良い居場所の中に求めたのだ。

引き出しが、たまたま、その底には最高に

柔らかい種類の亜麻布が敷いてある、商人らがインドから輸入するような、貴婦人が使うための、あの布だよ、

他の引き出しの上に突き出ている、

深さも充分で、そして深すぎない、

箆笥の一番上の、半分開いた引き出しが、

そこでお眠り、と猫さんを招いていたのだ。

えもいわれず喜んだニヤンは、

その状況を吟味して、それから占拠した。

くつろいで横たわっていると、まもなく、

単調な自らの鼻歌にあやされて、

生きることの気苦労を忘れて寝落ちした。

最後の眠りについたかのように眠っていたが、

その時、家事をしようと、女中が

中に入ってきて、その引き出しをびしやりと閉めたのだ。

何の悪意に駆り立てられたわけでもないが、

引き出しの中に誰が入っているのか全く無意識に。

そのショックで目を覚まし、(ニヤンは叫んだ、)

「今までに猫が、こんなふうにお世話されたことなんてあったかしら？

開いた引き出しはね、私が理解するところでは、私のために心地よい

隠れ家になるってことを示す、そのためだけに、開いたままだったの。

だって、だいたい気分が落ち着いたなと思うや否や

女中がやってきて、それが閉められちゃったのよ。

このハンカチ、なんてなめらかで、なんていい匂い！

ああ、なんて優雅な隠処かくところなこと！

私、諦めて、お日様が西に傾いて、

夕飯時だと呼んでくれるまで、

休むことにするわ。その時にはきつと、

スーザン<sup>(3)</sup>が来て、私を出してくれるわよ。」

夕暮れがやって来て、太陽が沈んだ。

猫ちゃんは未だに出してもらえないまま。

夜のろのろと過ぎ去って行き、

(ほんとのところ、猫にとつては、ずっと暗かったのだが)

輝かしい朝が新たな一日を始め、

灰色の夕暮れが再びあとに続き、

そして猫ちゃんが前の日のことを思い出さなくなったのは、

もしお墓に埋められたならそうだったのと同じだった。

飢えに痛めつけられ、狭い所に押し込められて、

今や彼女は近寄って来る死を予感し、嵌まり込んだ危機を意識して

一睡もせず、ゴロゴロと喉を鳴らすこともしなかった。<sup>(4)</sup>

その夜、偶然に、寝ずに起きていた詩人さんは、

不可解なガリガリ引つ掻く音を聞いたのだ。

彼の高貴な心臓はドキドキ鳴って、

そして、「あれは何だ」と独り言。

彼のそばのカーテンを引いて、

そして、外を覗いてみたけれど、見つかるものは何もなし。

けれども自分の耳に導かれて、箆笥の中に

何かが閉じ込められていると見当をつけた。

何だろうと怪しみながら、細心の注意を払い、音はそこで継続していることを確信したのだ。とうとう、彼によく聞き覚えのある声が、

長く、もの悲しいニャー、ニャーが、

音に敏感な彼の詩的な耳に聞こえて来て、

彼を慰め、恐れを追い払った。

ベッドから起きて床をノシノシ歩き、

急いで引き出しを調べ始めた。

まず、一番下の、それから止まることなく、

残りの引き出しを、順番に一番上の、まで。

だって、大方の人たちによく知られた真実ですからね、

何であれ、物が無くなると、それが出てくるまでに、

私たちは、正解の場所だけ除いて、

ありとあらゆる隅っこを探すものだということは。

猫さんは跳ねるように出てきた、今や、以前のように

軽薄な自惚れでいつぱいになって、ではなく、

自分こそ世界すべての注目の的となる主題だと

愚かにも考えるようなこともなく、

慎ましく、冷静に、彼女の、

あらゆる尊大な考えは矯正されて、

箆筒以外なら、どこでもいいから

あらゆる場所を願求めて。

それから、詩人さんはベッドの中へと歩を進めた、

頭の中でこんなことを深く考えながら。

## 教訓

自分自身の価値や重要性が、あまりに

崇高なものだ、という認識に注意せよ。

なされるすべての物事において、自分一人のために

周りのすべてが回り、動かねばならぬほど

自分はとても偉大だと、自分の重要性は

とても影響力があるのだと幻想を抱く者は、

艱難辛苦の学校で学ぶだろう、

自分の期待の愚かさを。

(1) *The Poems of William Cowper, Volume III: 1785-1800*, ed. John D. Baird and Charles Ryskamp (Oxford: Clarendon Press, 1995), pp. 66-69.

(2) 原文の英語は、*sedan* で *sedan chair* のこと。二人で前後を担架のように運ぶ一七一一八世紀の椅子駕籠、輿。

(3) トマス・グレイ (Thomas Gray, 1716-1771) の「金魚鉢で溺れた愛猫の死を悼む歌」では、溺れかかっている猫が助けを求めた声を「薄情なトムもスーザンも聞きつけてはくれなかった」 (*Nor cruel Tom, nor Susan heard, line 35*) とある。

(4) 原文の英語、*pur* は、猫が満足そうにゴロゴロと喉を鳴らす、という意があるが、この音は、空腹時や不安、恐れを克服しようとする時にも発せられる。松本舞、吉中孝志著『英詩に迷い込んだ』

猫たち―猫性と文学』(2022年、小鳥遊書房)、二四頁参照。こゝでは、閉じ込められた不安から声もゴロゴロ音も出せなかった、というわけである。

仔猫 (The Kitten)

ジョアンナ・ベイリー (Joanna Bailie, 1762-1851)<sup>(5)</sup>

君の無邪気な戯れが田舎人の終わりゆく日を

紛らわせる、気ままなひょうきん者よ、

夕暮れ時の火が間近に取り出され、

老いたしわくちや婆ばばあと頭の鈍い無骨者が腰を下ろし、

子どもは、三脚椅子の上で

彼の夕食が冷めるまで待ち、

薔薇より赤い頬つぺたの女中が、

燃え上がる薪束と同じに、熱し輝いて、

使用火の光に腰をかがめて、

てきぱきと器用に彼女の仕事に精を出す、そんな時、

さあ、こんなふうに笑い楽しむ顔に囲まれて、

君の巧みな技とひょうきんな愛嬌を見せておくれ。

後ろの方にぐるぐる巻かれて低く身をかがめ、  
ぎらぎらした目玉で敵を睨みつける、  
ぐるぐる回る主婦の紡錘、はたまた

ふざけたいはずらつ子が、さまよう君の視線を  
おびき寄せようと差し出した、  
地面に影を投げる、糸や藁だ。

それからこつそり前進、心そそり

移動する物に、獰猛に跳びかかれ。

お次は、無益な技でぐるぐる回り、君のしつぽが、

いないいないばあつ！でいつも君を挑発するのだ、

その漆黒の先つぽが、君の曲げた背中の向こうで

絶えず、するりと動いて見えるからだ。

ついに、君の回る中心から外れて跳びのき、

お尻を硬直させて空中に上げたまま、

横向きに進路を変えて、斜めに進む、

激昂して癩癩おこしたご婦人のよう。

もつとも、絹のガウンの裾が大広間の床を引きずる

すべてのご婦人方の中でも、けつして誰一人として

感嘆する他人の注目を捕らえるために、これほど変化に富む

妙技と気まぐれを披露するお方はいらつしやらないけれども。

自由奔放、とつぴな君の行為を語るのに、

規則が大事な韻律にそんな力が宿るものか？

ああ、駄目だーダツシュ、スパート、それからジャンプ、

めまいを起こさせるよなぐるぐる回りの疾走に、

跳んだり跳ねたり、高い騰躍のクルベット、

そして、何度も何度も宙返りするサマーソルト、

(現代の詩神に、使うのを許して  
もらった専門用語の表現だが)

こんな動きは、一等巧みな押韻詩作者の技でさえ挫いてしまう、  
志には富んでいるが、技術には乏しいのだ。

舞台衣装を身にまとう、技を極めた曲芸師すら、  
君に比べれば、ただの不器用な奴。

君には殆ど苦もないことをなさんがために  
手足、筋肉、全身を最大限に張りつめる。

その彼の技にも、思うに、呆然と見とれる観衆が  
大きな拍手喝采で報いること、しばしばなのだが。

でも、しばし君の気まぐれの戯れが止められるなら、  
君の労にも拍手喝采が報いるよ、

だってその時には、背中や縞のある横腹を  
何度も何度も優しく撫でられながら、

とあるわんぱく小僧の手の下で  
君は、慎ましく誇らしくじっとしているから。

つやつやの毛皮を大きく膨らまし、  
大きな低い音でせわしくゴロゴロ、喉を鳴らす。

平坦な音にうまく拍子を合わせるように、  
ひつつかむ足が地面を何度も軽くたたき、

髭のある頬から柔らかに、半分閉じた目を、  
穏やかにおとなしく、かすかに見せながら、

季節まだ早き薔薇のトゲの如き、

傷つけることなきかぎ爪をみな開いて見せる。

だが、田舎家の火のそばで粗野な田舎人たち  
だけが、君の離れ技を賞賛するわけではない。

学識ある賢者、彼の思想は人智の果ての果てをも  
探究し、はたまた足枷から解き放たれた想像力で

詩想の空の高みを通って  
天駆ける、そんな賢者も、

立ち止まり、ふつと微笑む。君が肘掛椅子を  
よじ登るのを、はたまた足元のマットの上で

もがきながら、スリッパを履いた足と一戦を  
交えるのを見て、たちまち空気は変わるのだ。

夫に先立たれたご婦人や、孤独な乙女も、  
客の訪れることなき家の、静かだけれど

わびしい片隅で、日々、年老いてゆき、  
本のページをめくるのも稀になるころ、

彼女の炉端に君のため、丸いコルクや  
丸めた紙を落とし、巻き取った糸束の

ほどけた端を、いたずらな眼差しで見つめ、  
捕まえようとする君を叱りもしないで、

自分の裁縫のもっと上手な技を妨げてでも、  
君の気まぐれ、やりたい放題にさせるのだ。

淋しい塔や牢獄に閉じ込められて、

鬱々と落ち込みがちの心が、

来し方の厄介な事どもを思い出し、

揺らぐ、かすかなランプの光明が

ふさぎこんだ夢から彼の目を覚まさせてしまう時、

此の世と世の在り方をみな厭う、そんな人でさえ、

彼の座っている周りで君がじやれるなら、驕り高ぶった

彼の心は、その分優しく鼓動を打っていると感ずるので。

そして、生きているものと絶えず結び合わせる

絆を君の中に見つけて、微笑むのだ。

では、君は何処から、知性を持たぬ猫よ！

こんなに私たちを魅了する、魔法のような力を得るのか？

それは、君のぎらぎらした目の中に、

そして素早い動きの中に、私たちが

― 危害の及ばぬ安全な所でくつろいで、

ほっこりと暖炉の片隅を陣取る一方で、―

獲物に跳びかかるライオンを、

残酷な遊びに興じるトラを、見出すからか？

それとも、君の中に私たちは、あらゆる

変化に富んだ気まぐれな優雅さと一緒に、

同族の目で見られた、油断ならない、

落ち着きのない幼年期の、典型を見つけて出すからか？

ああ！ 君のように私たちの感覚を楽しませた、

すばしこく、遊び好きの子どもたちの多くが、

退屈で、真面目腐った大人になってしまうと

私たちの心を、奇妙に嫌悪して、自分のものと認めない<sup>6</sup>。

だから、可哀そうな仔猫よ！ 君は耐えねばならないよ、

君が取り澄ました大人の猫になる時には、

美味しそうな食卓から荒々しく追い払われ、

うんざりするほどの平手打ちや怒りの言葉を浴びることを。

けれども君は、思うに、ほとんどいつも私たちの

お気に入りの遊び友達だったのだから、どうか

君の経験する変化が穏やかなものでありますように！

時間の流れが君から私たちの愛を奪ってしまう時も、どうか

君の食事皿は、公共の善のため、

美味しいおかわりで再々満たされて、

太った主婦が、いつも君のことを思いますように、

見目麗しく、用心深い、ネズミを捕まえる猫だと。

そして、君の寿命が尽きた時も、どうか

池の中や掃き溜めに投げ捨てられることなく、

一家の主の鋤すきに載せられ優しく運ばれて、

しかるべききちんとした土地に横たえられますように。

そして、子どもたちが、涙できらきら輝く目をして、ここに

可哀そうに、老いたニヤンが眠っているんだよ、と

指さして教えてくれますように。

(5) *Fugitive lenses* (London: Edward Moxon, 1840), pp. 194-200.

(6) 仔猫が、人間の幼年期には保持され、大人になると失ってしまう好奇心と無邪気さを体現しているという考え方は、1804年に発表された William Wordsworth の 'The Kitten and the Falling Leaves' に共通する主題である。

猫についての詩 ('Verses on a Cat')

パーシー・ビッシュ・シェリー

(Percy Bysshe Shelley, 1792-1822)

猫は困っている、  
それ以上でもなく、それ以下でもない。  
善良な人々よ、あなた方にはつきり言わねばならない、  
僕が罪びとであるのと同じように確かに、  
猫は幾らかの食べ物を求めて待っている、  
自分自身の小さなお腹を満たすために。

あなた方は、容易には思いつかないだろう、  
地に住まう者たちに拷問を与える  
困窮のあらゆる形態を。

そして、同じ数の悪魔たちのように、  
誕生以来、哀れな魂に取り付いている  
さまざまな不幸の数々を。

ある人たちは生きていく糧を必要とし、  
他の人たちは、老人は  
死んでくれればいいのにと願う。  
どれが一番いいのか、  
ご想像にお任せします、  
だって、僕には敢えて言えないから。

ある人は社交を、  
他の人は変化を望み、  
別の人たちは平穏な暮らしを、  
ある人たちは食べ物を欲する。  
他の人たちは、同様に、  
妻が欲しいとだけ思う。

でも、この哀れで小さな猫は、  
自分の小さな胃を満たすため、  
鼠を一匹欲しいと思っただけ。  
彼らを黙らせておくために、  
そういう食べ物をもらえる人たちが幾人かいたら、  
同じくらい良いことだろうに。

(7) *The Works of Percy Bysshe Shelley in Verse and Prose*, ed. Harry Buxton Forman, 8 vols. (London: Reeves and Turner, 1880), iv, pp. 313-314.

エステル<sup>(8)</sup>の雄猫 (Esther's Tomcat)

テッド・ヒューズ (Ted Hughes, 1930-98)<sup>(9)</sup>

日がな一日、この雄猫は寝ている、平たく長くなって、  
古い、もじやもじやした毛のマットのよう、口もなく、眼もない。  
絶え間ない戦いと雌争いのせいで、  
耳はぼろぼろ、頭もぼこぼこ。

古い縄と鉄の束のように、  
青い夕暮れどきまで、眠る。それから再び現れるのだ、  
緑色の、丸い宝石のような眼が。大きく、赤く、あくびをして、  
牙は、ご婦人の針のように鋭く、輝く。

かつて一匹の雄猫が、馬にまたがった騎士に跳びかかり、  
鉤針の罠のように、首の周りに組み付いた。  
騎士は、ひっかき、噛みつく相手と戦いながら馬を走らせた。  
何百年経った後にも、血の跡が残っている、そこに、

その雄猫のせいで死んで、騎士の倒れた、その石の上に<sup>(10)</sup>。  
それは、バーンバラでのことだった。その雄猫は

いまでも、密かに、ちよっとした教の犬たちのはらわたを抜き、  
しばしば、人の飼う無邪気な若いめんどりの頭を楽々とちよん切り、  
不死身だ。犬の凶暴さから、

至近距離で発射された弾丸から、彼は  
自らの皮を無傷で守ってきた、そしてゴミ箱の間で  
仔を産ませる、フクロウの丸顔のような月からも

無傷で。彼は眠りの上で、跳び、  
すばしこく歩き、心は月を思う。  
夜ごと、人間たちの丸い世界の上を、  
屋根の上を行く、彼の眼と鳴き声が。

(8) 旧約聖書「エステル記」の主人公エステルは、ペルシャ王アハシ  
ユエロスの二番目の王妃となり、強力な臣下でユダヤ人の敵であ  
ったハマンの悪計から養父モルデカイを含むユダヤ民族を救っ  
た。その過程で、この物語には、王をして「ユダヤ人は首都ササ  
で五百人を殺し、またハマンの十人の子を殺した。王のその他の  
諸州ではどんなに彼らは殺したことであろう。」(第九章十二節)  
と言わせた残酷な側面が見いだせるが、それが「エステルの雄猫」  
の残忍さに反映されているのかもしれない。また、テッド・ヒュ  
ーズの妻、シルビア・プラスを自殺に追い込む一つの原因であつ  
た、愛人アツシア・エステル・ウィーヴイル (Assia Esther Wevill,  
1927-1969) が、ドイツ系ユダヤ人で、第二次世界大戦の初期にナ  
チスの迫害を逃れて数か国に移民した伝記的事実があることは  
興味深い。このエステル自身は、彼女の三人目の夫と一九六〇年  
にイギリスで結婚しているが、「エステルの雄猫」は、同年に出版  
されたヒューズの詩集に掲載されている。既にヒューズとエステ  
ルの交際が始まっていた可能性がないわけでもない。もしそうな  
ら、「エステル<sup>(8)</sup>の雄猫」の「雌争い」とは、自分は既にエステルの

ものだと暗示しつつ、ヒューズ自身が人妻を奪おうとしていた状況を反映させた表現と読めなくもないか。

(9) *Collected Poems*, ed. Paul Keegan (London: Faber and Faber, 2003), pp. 66-67.

(10) 南ヨークシャー地方に伝わるバーンバラの騎士の言い伝え。バーンバラへの途上の森の中で、騎士パーシー・クリセイカーは、オヤマネコに襲われた。死闘を繰り広げながら、バーンバラの聖ペテロ教会に辿り着き、その柱廊で両者は息絶えた。その時の血の跡が今でも残っているという。

(よしなか たかし、広島大学大学院人間社会科学研究科教授)

## **Four Poems on Cats in Japanese Translation**

Takashi YOSHINAKA

**Key Words: cats, English poetry, Japanese translation**

Four poems on cats are translated into Japanese with notes: William Cowper's 'The Retired Cat', Joanna Baillie's 'The Kitten', Percy Bysshe Shelley's 'Verses on a Cat', and Ted Hughes' 'Esther's Tomcat'.